

PHD LETTER

PEACE, HEALTH & HUMAN DEVELOPMENT

PHD LETTER
Volume
141
2019.7

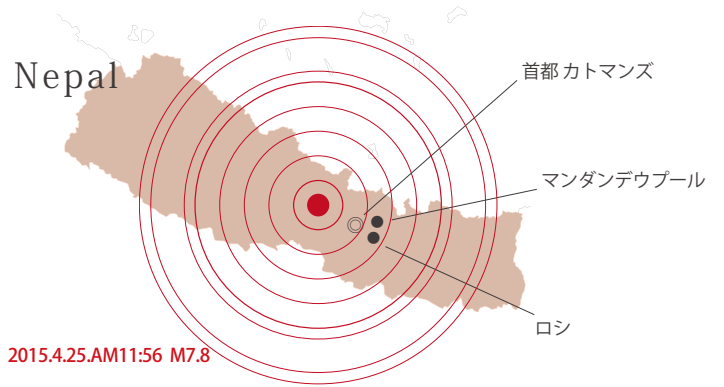
公益財団法人PHD協会
2019年度会報141号

PHD Movement vol.24

ネパール大地震被災者救援活動報告

2015年4月の発災から5年目。

被災地復興のため、PHD研修生の奮闘が続きます。



PHD SAVE NEPAL



Build Back Better

より良い復興

PHD LETTER Volume.141

Contents

- P.2-4 2019年度研修生レポート
スシラ・バセル・サルキ、プットリ ダリア、ゼンモーエー（ゼンゼン）
- P.5 22期国内研修生自己紹介（2019年度）
- P.6 2019年度新スタッフ紹介
- P.7-8 **PHD Movement** vol.24
PHD SAVE NEPAL ネパール大地震被災者救援活動報告
～ Build Back Better（より良い復興）～
- P.9 短期研修生報告 「私は諦めない、何度でもトライします！」
- P.10 ロータリー米山記念奨学会
- P.10 日々是東奔西走
- P.11-12 第36回タイ・スタディツアー（2018年度）報告
- P.13 2019年度事業方針・計画
- P.14 PHD活動紹介 2019年3月～2019年6月
- P.15 PHD News

表紙写真/ネパールPHD研修生たち。左からプレムさん（2013年度31期）、ムクさん（2014年度32期）、カンチさん（2015年度33期）、ミスラさん（2017年度35期）。

～「貧困に苦しむ地域に一番必要なのは人材」～

温故知新 岩村語録 その16

岩村昇は上記のように言い切る。ネパール時代、村の青年を保健委員に選び、結核の症状や予防法、薬の投与の仕方を教え、自分はあくまでアドバイザーに。懸命に村人を治療する青年の姿と目の輝きに本当の国際支援を見た。「目は心の鏡。いくら、お金や物を支援してもねえ。」

【出典：読売新聞 1993年8月10日版（神戸支局上田昌義）】

お金や物の援助ではないからこそ生まれる目の輝き。PHD協会ももうすぐ40周年を迎えようとしているが、研修生のそれは変わらずに私たちを勇気づけてくれている。（さ）



1982～83年度国際ロータリー第266地区年次大会にて講演をされる壇上の岩村昇先生。講演のタイトルは「共に生きる 生きるとは分かちあうこと」。今日まで続くPHD協会のモットーである。



PHD

PEACE, HEALTH & HUMAN DEVELOPMENT
公益財団法人PHD協会

PHD運動とは1962年よりネパール、東南アジアを中心に医療活動に従事した岩村昇医師の提唱による国際社会福祉運動です。これまで自分のためだけに使っていた時間、技能、財などの10パーセントをささげ、平和（Peace）と健康（Health）を担う人づくり（Human Development）をすすめ、共に生きる社会をめざし、1981年に今井鎮雄（初代PHD協会理事長）と共にPHD協会を設立しました。

PHD LETTER 141号

発行：公益財団法人PHD協会
住所：〒650-0003 神戸市中央区
山本通4丁目2-12 山手タワーズ601
電話：078-414-7750
FAX：078-414-7611
E-mail：info@phd-kobe.org
URL：http://www.phd-kobe.org
郵便振替口座：公益財団法人PHD協会
01110-6-29688



PHD 37期研修生紹介（2019年度）

山本 健太郎＝文

スシラ・バセル・サルキ

ネパール / 22歳



昨年度の研修生サビナさんとは隣人で親交が深く、同じジトゥルポカリ村出身です。村にはダリット*の中で最も地位が低いサルキと呼ばれる人たちが主に住んでいます。スシラさんもサルキの方で、中等教育を9年生まで終え、5年前の17歳の時に結婚を機に、この村に嫁いできました。自身は4歳の息子を持つ母親です。今はハラバラというダリットで構成される女性グループで意欲的に活動しながら、家畜や会計管理、プロジェクトのファシリテーターの仕事率先してこなしています。日本で農業の土づくりから収穫までの一連のプロセスを学び、村のグループに日本で学んだことを伝えるとともに、柑橘類の有機栽培を実現し、果樹園を作ることが彼女の夢です。また既に帰国したサビナさんとともにハラバラを通じて、女性の社会進出やエンパワーメントに取り組んでいきたいと考えています。

スシラさんの研修したいこと

有機農業

野菜、果物一般の土づくりから収穫までのプロセスを学ぶことで、村の女性グループに自分が学んだことを伝えていきたいと考えています。自身で果樹園を作りたいという夢があるとともに、安全な作物の作り方や安定的な収穫量を確保できる農業を村で行ってみたいです。

保健衛生

自分自身が母親ということもあり、日本の幼児や子どもに対するケアや、病気の際の対処について学び、母国に帰って知識や経験を還元したいと考えています。

女性の人権

ダリットへの差別は減りましたが、現存しています。日本の人権問題について学び、村の差別撲滅や女性の識字率向上、社会進出に取り組んでいきたいと考えています。



滞在家族/黒野美代子さん

毎日元気いっぱいであるスシラさん。日本語の理解もよく、最近は漢字にも興味を示しています。必要なことも話せば、いつも素直に聞いてくれます。初めて我が家に来た日は魚も豚もダメで、鶏だけ大丈夫ということで困ってしまいましたが、今では魚は鯉節、焼き魚、煮魚まで、豚に関しては餃子やスシラさんの好きなカレーに鶏ミンチと混ぜて食べられるようになりました。

*ネパール・カースト制度における被差別階層に属する人々。



PH 37期研修生紹介 (2019年度)

西スマトラ州ソロ郡タラタジャラン村から5人目の研修生となります。村は州都パダンからバスに揺られて3時間程内陸部に入った山村で、人口約900人、約220世帯、標高約1,100mに位置しています。家族は6人、5人兄弟の3番目で姉が二人、妹弟がそれぞれ一人ずついます。自身がまだ幼い頃に、父親を病気で亡くし、その後母親が女手一つで育て上げました。家族の収入源は米とさとうきびの販売で、野菜などは自身で栽培し、普段の食生活の足しにしています。自身の仕事は高原都市プキティンギの洋裁工場で縫製工程を2年間担当していました。日本では、型紙作り、デザイン、裁断等の洋裁における全工程を学び、帰国後に村の人たちに伝えたり、家族を助けていきたいと考えています。現在の夢は自分で洋裁の工場を作り、村の女性たちの雇用を確保し、過去の研修生たちと連携しながら今後のタランバング地域の発展に貢献していくことです。

プットリさんの研修したいこと

洋裁

2015年に高校を卒業し、母親の農業を

手伝っていました。2016年から他都市の縫製工場仕事を始めて、洋裁に興味を持ちました。縫製工程については2年間の仕事経験を通じて理解していますが、洋裁における型紙作り、デザイン、裁断を含んだ全工程を学び、自分で学生の制服やドレスを最初から仕上げまでできるようになりたいと思っています。それは自身の収入源になります。それは自身の収入源になりませんが、長期的な村・地域の発展や家族の未来にも繋がっていくと考えています。

保健衛生

村の人たちの健康問題で多いのは、お菓子等や香辛料を多く含む食べ物の偏食による虫歯や体調不良です。自身の経験から、歯の病気予防を学ぶことに意欲的です。また感染症や村のゴミ山などが原因で引き起こる病気も多いですが、村に診療所が一つしかなく、救急車を呼ぶのも高額です。日本の保健衛生や日頃の病気予防について学び、帰国後村の人に伝えることで、病気になるのを防ぎ、より健康な生活を実現させたいと考えています。

プットリ ダリア

インドネシア / 22歳



滞在家族 / 宝田 和正さん てるみさん

いつもさりげない優しさや気遣いができるプットリさん。お母さんが畑仕事などで忙しいときは率先して掃除や洗い物を手伝ってくれます。外出するときは必ずお父さん、お母さんの手に自分の額を当てて、今日も平安が訪れますようにとお祈りしてから行きます。少食ですが、徐々に日本の食事に慣れていってくださる良いなと思います。また今年も家族が一人増えて、家が明るくなりました。



ゼンモーエー (ゼンゼン)

ミャンマー / 24歳

ミヤンマーのマンダレー管区、トートウイン村から初めての招聘です。8人兄弟の7人目で、5歳の時に父親を亡くし、村の僧院学校を運営しているお坊さん(サンダーワラ氏)のお世話になりながら、高校・大学卒業まで苦学して修了しました。常にお坊さんへの感謝と恩義の気持ちを抱き、ずっとこの学校を支え続けたいと強く語ってくれます。4年(保育園で2年間、中学校で約2年間)に渡り、教師としての経験を積んできました。日本では特に英語教育を始め、各教科書とその教え方やクラス運営等を中心に学び、生徒たちがより興味・関心を持ちながら取り組めるような授業を自身の学校で普及させ、継続的に地域に貢献していきたいと考えています。夢はお坊さんの営む学校で現在空席となっている校長先生のポストに就き、リーダーとして他の先生たちと協力しながら、学校をより良い未来へと導いていくことです。

ゼンモーエーさんの研修したいこと 教育

僧院学校で、子どもたちにビルマ語と英語を教えています。村の子どもたちにどのように効果的に英語を教える事ができるのかに加え、他教科も含めた学生に興味を持ってもらえる教え方を知りたいという思いから、日本では特に初・中等教育の教科書や教育法・クラス運営を中心に学び、帰国した際に自分の学校や生徒たちに還元できる部分を探していきたいと考えています。

保健衛生

トートウイン村には糖尿病や頭痛、高血圧の症状を持った人が多くいます。学校の先生ということもあって、日々の生活で子どもたちの歯の病気、皮膚病や体調不良のことが気になっています。

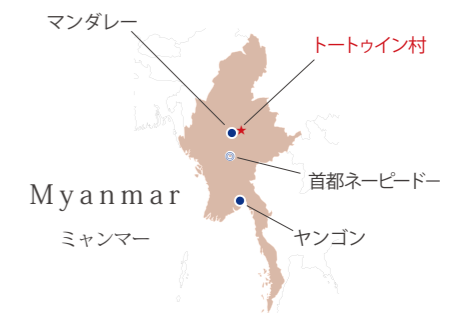
食事・栄養面や衛生面が影響しているのではないかと感じていますが、実際にどのように行動に移せばよいか分かりません。保健分野の中でも村に多い歯や皮膚の病気、感染症などを防ぐための衛生面での対処・対策を学んでいきたいと考えています。

PH 37期研修生紹介 (2019年度)



滞在家族 / 葛原時寛さん 香織さん

ゼンゼンさんはとても素直で本当の家族の一員のような様子。体格から見て少食と思っていると、食事はしっかり食べてくれるので安心しました。ミャンマーでは手を使って食事をするので、箸を使うのが初めはぎこちなかったですが、最近はどんなものでも上手につかむことができ、びっくりしています。日本語で一生懸命話しかけ、もっと勉強したいと意欲的です。



22期国内研修生自己紹介（2019年度）



山本 仁美

研修兼広報担当

はじめまして、大阪女学院短期大学2回生の山本仁美です。大学に入る前から国際協力に興味があり、2019年のPHDタイスタディツアーに参加しました。そのツアーの際、PHDの国内研修生制度を知り、これに参加しました。これから一年間、研修生をサポートし、彼女らと共に私自身も成長していきたいと思っています。そして、PHDでの国内研修生としての経験が、私

の国際協力の世界での第一歩になれば良いな、と考えています。どうぞよろしく願いいたします。

他己紹介

2019年度も大阪女学院から国内研修生が来てくれました。奈良からはるばる近鉄と阪神を乗り継いで2時間以上かけて、PHDまで通勤してくれる仁美さん、国際協力の世界への熱量を感じさせてくれます。しかし、本人はいたって飄々としていて、頼んだ仕事もあっという間に仕上げてくれます。そして、研修生にも優しく応対してくれています。まさに、理想の国内研修生、今年1年期待しています。

広報・啓発担当 八木 純二



槇原 杏菜

研修兼広報担当

はじめまして、大阪女学院大学4回生の槇原杏菜です。大学では人権や国際関係について勉強しています。2019年度の国内研修生に応募したきっかけは、2018年のミャンマースタディツアーに参加したことです。研修生と国内研修生の温かい関係性や、継続的な支援など人と人とのつながりをとても大切にしていると感じました。私自身も国内研修生として感じたいとその暖かさを考えたからです。また、このスタディ

ツアーをきっかけに、将来は開発途上国で人材教育をしたいと考えています。そのために、この一年間を通じて教育の仕組みや、研修生のサポートをしつつ、彼女達と共に学んでいきたいと思えます。よろしく願い致します。

他己紹介

私と和歌山つながりということで、通うのは大変だけど、来てくれたらいいなと思っていました。人との繋がりを大切に、日常の色々な事にアンテナを張り、取り組んでいます。研修生たちとも積極的にコミュニケーションを図り、何でも気づいたことは伝えてくれるので、すごく助かります。PHDでの経験を経て、大きく羽ばたいていく杏菜さんに期待しています！

研修担当 山本 健太郎

2019年度新スタッフ紹介



山本 健太郎

研修担当

自己紹介

はじめまして、この春から研修担当として働かせて頂いている山本健太郎と申します。

中南米のNGOや一般企業での数年を経た後、ちょうど自分が人生の岐路に立っていたときに出会ったPHD協会には深い縁と恩義を感じています。それは私自身がこれまで大切にしてきた人との繋がりという点において、PHDの理念に強く通じ合うものを感じたからです。絶対に挑んで後悔することは無いと確信しました。

研修生それぞれが抱く思いや覚悟を受

け止め、後ろから支えながら、私自身も彼女たちの姿勢から学び、人として成長していければと思っています。“草の根の人・地域づくり”を掲げるPHD協会で、研修生や職員、ご支援して下さる皆さまとの出会いや繋がりに感謝しながら、研修生とその未来のために継続して何が出来るか、日々考えながらお仕事をさせて頂きたいです。

皆さま、どうぞ宜しくお願い致します。

他己紹介

期待の大型新人、山本

PHDに似つかわしく無い爽やかな好青年。メガネをかけていない男性研修担当はいつ以来？もしかしたら初かも？若干人見知りなところはありますが、研修生への眼差しはどこまでも優しく、深い。これから訪れるであろう苦難も研修生への愛で乗り越えてくれると確信しています。研修担当としての伸びしろは特大なので、皆さん温かく見守っていただければ幸いです。

事務局長 坂西 卓郎



中村 朱里

総務担当

2019年度の総務担当として入職された中村朱里さんは物静かな佇まいの方です。それでいてテキパキと仕事を進める姿は、既に何年もPHD協会でも働いてきたスタッフのよう。しかし、それもそのはず、中村さんはPHD協会に入職される前は日本とフィリピンでNGOワーカーや日本語教師として、国際協力の第一線を歩んできた方でした。加えて、イギリスの

大学で平和学を修められ、英語も大変堪能な中村さん、こういう優秀な方に総務を担当してもらおうと、PHD協会も落ち着いた団体になるんだろうな、と期待しています。

ちなみに、本当のお名前は「ギリガン朱里」さん。ギリガンはお連れ合いさんがフィリピンの方で、その苗字だそうです。

広報・啓発担当 八木 純二



加藤 志歩

広報・啓発担当

2016年度国内研修生の加藤志歩さんがPHDに戻ってきました。普段は制作会社でDTPオペレーターとして働く彼女、月2回週末の土曜に現れては、広報の仕事を手伝ってくれています。

広報・啓発担当 八木 純二

PHD Movement vol.24

ネパール大地震被災者救援活動報告
～ BuildBackBetter (より良い復興) ～

PHD SAVE NEPAL

2015年4月25日に発生したM7.8の大地震から4年が経過した。首都カトマンズから始まった被災地復興も住宅や診療所の建設、水道やトイレなどの衛生設備の整備が進み、ハード面では随分と進んできている印象を受ける。しかしながら、アジアの最貧国の一つでもあるネパールの脆弱なインフラに与えた影響は深刻であり、山間部に暮らす人々は未だに厳しい生活を余儀なくされている。

この4年間、関係機関が「Build Back Better (より良い復興) *」を合言葉に復興への取り組みを続けてきた。当会でも皆様のご支援をいただき、被災者の生活のBuild Back Betterに取り組みしてきた。2018年度の活動について現地レポートを元に報告したい。

2018 - 2019 活動概要

PHD協会は2014年度研修生ムクさん、2015年度研修生カンチさんの活動費を支援



SAGUNのスタッフとしてヤギを肥育する農家の話をきくムクさん。(下写真左)

し、現地NGOであるSAGUNとの協働の下、以下の活動を実施した。

1. ヤギ飼育による収入向上プロジェクト
2. 貧困世帯への奨学金プロジェクト
3. ロシ地域行政との協働によるアイキャンブ(巡回眼科治療)
4. ECD(就学前教育)サポート
5. 地域行政との連携、協働ミーティングの実施

上記の中からムクさん、カンチさんが中心的役割を担った1.及び3.及び4.のプロジェクトについて報告したい。

ヤギ飼育による収入向上プロジェクト

本活動はロシ地域で女性と最も恵まれない家族をエンパワーメントする最も重要な活動の一つである。93家族がこの活動の恩恵を受け、そのうち43家族はPHD協会からの支援、50家族は日本のNPO「地球の木」の支援を受けた。動物を扱う以上、ヤギ肥育はリスクのあ

事務局長 坂西卓郎 = 文
～分かち合い実践録～

る事業でもある。ヤギは病気にかかり、死ぬこともある。これを補償する家畜保険がネパールにもあるのだが、それが信頼できない。ヤギが死亡した際、特に雨季においては保険の担当に連絡することが困難になり、村まで来てもらえないのだ。その結果、保険適用を受けられず、補償を受けることができないことがある。そこで家畜保険よりも、ヤギを健康に肥育することに費用を費やす方が良く考えた。まず、家畜専門家を動員、各農家を個別にモニターし、問題がどこにあるかを調査した。そして、この調査結果にもとづいて、農家に肥育訓練を提供するとともに、ヤギ用の薬を支給したのだ。一連の調査と肥育農家支援の結果、補償が受けられない可能性のある家畜保険よりも、ヤギを健康に肥育する方が安上がりに済むことがわかった。

一方で地方自治体による独自の家畜保険への取り組みも始まろうとしている。この取り組みに対し、地域の実情も考慮されるように地方自治体との話し合いを始めている。



アイキャンブにおいて、眼科医の診察を受ける男性。



上写真：集団で白内障の手術を受けて、みんなで喜ぶ婦人たち。彼女たちが一様にサングラスをかけているのは、目の保護のためである。

ロシ地域行政との協働によるアイキャンブ(巡回眼科治療)

ロシ地域行政の委託を受けたNGO「SAGUN」とKirtipur眼科病院の共同で、ロシ地域の2か所において、アイキャンブを開催した。約974人の患者がアイキャンブで治療を受ける機会を得た。そのうち197人が白内障の外科手術を受けた。年配の患者が手術後に目を開いたとき、関係者は本当に興奮し、幸せを共有することができた。この活動はPHD協会が支援するSAGUNのスタッフ、ムクさんの活躍なしには実現不可能だった。



右写真：アイキャンブでの活躍を認められ、SAGUNのカマル(前列左)さんより、表彰されるムクさん。(前列右)

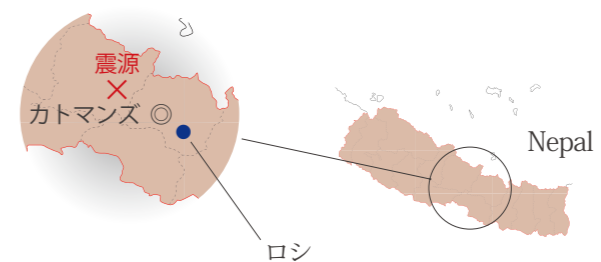
ロシ地域でのECD(就学前教育)サポート

子どもの権利を確保するために、9つの学校とECDセンターに教育支援を実施した。具体的には教材、遊具、本、カーペット、クッションなどの備品を提供し、低学年の生徒や幼い子どもたちにも適した学習環境を学校やECDセンターに整備した。また、ECDの教師と校長のためにトレーニングを実施し、元PHD研修生のカンチさんが、これらの活動で中心的な役割を担った。



右写真：地域の幼い子どもたちの教育環境改善に尽力中のカンチさん。

山羊肥育状況一覧(単位 山羊の数:頭 収益額:ネパールルピー 1ネパールルピー=0.97円)				
グループ名	最初に支援した山羊の数	飼育により増加した山羊の数	山羊の合計数	売却後の収益額
ラジャバス村山羊肥育グループ	15	18	33	145,000
パンンチェ村山羊肥育グループ	26	27	53	96,000
ピンタリ村山羊肥育グループ	11	15	26	40,000
ラムチェ村山羊肥育グループ	10	26	36	59,000
タクレ村山羊肥育グループ	26	37	63	112,500
コカム村山羊肥育グループ	31	26	57	48,000
Thilwar 10家族新規グループ	-	-	-	-
合計	119	149	268	500,500



*災害の発生後の復興段階において、次の災害発生に備えて、より災害に対して強靱な地域づくりを行うという考え。元々は1995年版神・淡路大震災に際して兵庫県が提唱した概念。

REPORT :

短期研修生報告

「私は諦めない、何度でもトライします！」

短期研修生として2019年3月29日から7月8日まで再来日したモーママさん。兵庫県婦人会館ユネスコ基金の助成を得て、兵庫県内で青少年との交流を実施しました。

坂西 卓郎 = 文

モーママさんは2013年度研修生として来日し、2014年の3月にミャンマーに帰国。その後、約5年間、地域のために貢献してきたモーママさんに帰国後の活動について聞きました。

Q. 2014年に帰国した後の活動を教えてください。

モーママ (以下 モ) : 最初はHIVのことに取り組み、患者数を減らすことに成功しました。その後、栄養とごみの問題に取り組みましたよ。栄養は塩と砂糖、油を少なくすることを村人に働きかけ、ごみの回収は3年前に私が始めました。ごみの回収は3年前に私が始めました。村にごみが多いと10年後、20年後が心配。今は毎週1回、祖母のトラックを借りて7人ほどで村を回ってごみを回収しています。



拾い集めたゴミをトラックの架台に載せていく、モーママさん(左下)とタインシェ村の人たち。

Q. 村の人たちは最初から、話を聞いてくれましたか？

モ: 全然聞いてくれなかったね(笑)。でも私は諦めずに何度も何度も言いましたよ。

Q. 村の人たちが話を聞いてくれるようになるまで何年ぐらいかかりましたか？

モ: 3年ぐらいかな。栄養のことは今は60%の人が聞いてくれます。

Q. 成果が出ない時に心が挫けそうにはありませんでしたか？

モ: 顔が小さくなった(ミャンマーの表現。「恥ずかしい」という意味)。村の人から悪者扱われることもあって、村に住みたくないと思うこともあったよ。でも、私は批判を気にしない。私が良いことをやり続けたらいつかわかるじゃないですか?それはムームーさん(1993年の研

修生でモーママさんの幼稚園の先生)から学んだこと。

Q. モーママさんの今後の目標は？

モ: ゴミのことをもっとがんばりたい。今は時々ボランティアが足りなくて困っている。集めるは大変。仕事する人は男しかできない。ごみのことを理解してくれるのも今は50%の人だけ。私が良いことをやり続けたら、村の人たちもいつかわかるじゃないですか？

今思い返してもモーママさんの研修生選考面接は衝撃的でした。それまでの候補者は軍事政権の影響もあってか、自分の意見をはっきりと述べる方が少ない印象でしたが、モーママさんは違いました。本人も「私は周りの友達とは違う、どうしてかな?(笑)自分の意見を言わないと道は切り開けない」と語っています。自分の意見や意思を堂々と表明するモーママさんに勝手ながら当時進行中だった民主化の風を感じたものでした。

そして期待に違わずに帰国後、精力的に活動を続け、地域を巻き込むという成果を出しています。本文中にもあるように「挫けない心」が素晴らしく、個人的にも尊敬しています。また昨年度の研修生サンダーモーさんとの出会いもモーママさんがもたらしてくれたようにその活動は地域を超えて波及しています。今後の活動にも期待したいです。

ロータリー米山記念奨学会

2019年度も米山記念奨学生としてPHD協会の研修生3名を受け入れていただきました！

濱 宏子 = 文

◇ 2019年度のお世話クラブとカウンセラーの方々 ◇



三村 浩之さん
加古川中央ロータリークラブ

スシラさんのカウンセラー



芝田 一夫さん
川西ロータリークラブ

ゼンモーエーさんのカウンセラー



大見 春樹さん
篠山ロータリークラブ

プットリさんのカウンセラー

日々是 東奔西走

研修担当
山本健太郎

『中南米からアジアへ PHDへ繋がる思い』

私が初めて中南米の地に降り立ったのは約5年前の2014年8月、グアテマラという国でした。当時現地の言葉もあまり理解できず、勢いだけで飛び込んでいった自分を迎えてくれたのは、障害児という理由だけで、幼少期に親に捨てられてしまった子どもたちでした。彼らの自立支援に携わる日々の中で気付かされたのは、自分は日々周りの大切な人たちに支えられながら生きているということでした。それは一見当然の事ですが、当時の私に自分も誰かにとって必要とされる人間になりたいという人生観を与えてくれたのは確かです。

その2年後の2016年9月、パラグアイという国で農村部の貧しい子どもたちの教育に携わる機会がありました。訪れた当初は村に見慣れないアジア人が来たことで、彼らの中にも違和感があり、私自身も彼らとの距離を感じました。ですが、毎日一人一人との会話やコミュニケーションを続けることで、相互理解も深まり、最終的

本年度もネパール、ミャンマー、インドネシアの研修生達が3つのロータリークラブでお世話になります。毎月の例会に出席し、研修や日本の生活の様子などを報告し、奨学金をいただきます。

ネパールのスシラさんは昨年のサビナさんに引き続き加古川中央ロータリークラブでお世話になります。今年度は税理士の三村さんがカウンセラーです。

ミャンマーのゼンモーエーさんは例年通りミャンマーと親交の深い川西ロータリークラブでお世話になります。カウンセラーは前会長の芝田さんです。

インドネシアのプットリさんも例年通り篠山ロータリークラブでお世話になります。篠山ロータリークラブは牛の事業でインドネシアと深く関わって下さっています。カウンセラーは前会長の大見さんです。

3名とも各ロータリークラブで1年間数々のプログラムを通じ皆様と親交を深め、帰国する頃にはお父さんと娘のような存在になって参ります。皆さま、本年度も3名の研修生をどうぞ宜しくお願い致します。

には私を彼らのコミュニティの一員として迎えてくれました。彼らとの日々は今でも尚、自分を励まし支えてくれます。

人は皆それぞれ違って当たり前です。ですが、その中でお互いに理解や尊重の気持ちを持ち、考えや価値観を共有して分かり合おうとする中に、人生の豊かさはあると自身の経験から気付かされました。今年度の37期研修生(スシラさん、プットリさん、ゼンモーエーさん)も三者三様ですが、それぞれの個性の中に沢山の魅力があります。彼女たちが共に支え合いながら、研修を通じて多くの学びや気づきを得られるような寄り添いができればと思います。



日本の文化紹介授業「折り紙」の様子(パラグアイ農村部の児童教育支援プロジェクトにて)



カレン民族の子どもたちにより伝統的なパンブーダンス。上からつるされた布を持って竹竿の間にうまく足を運びいれながら、紐のように編み、またほどこいてゆく。

REPORT :

第36回タイ・スタディツアー(2018年度)報告

カレンのお母さんグループを訪れる毎年恒例のタイ・スタディツアー。

2019年2月18日～27日(9泊10日)の日程で行って来ました。

芳田 弓生希=文

大阪女学院短期大学の学生12名と共にタイ北部のチェンマイ県、メーホンソン県に出かけてきた。山岳民族カレンの村でのホームステイ、草木染手織り布の生産者グループとの交流に加え、チェンマイ近郊ではNGO等を訪問し山岳民族やストリートチルドレンなどの課題について学んだ。

ストリートチルドレン@アーサーパッターナデック財団ドロップインセンター

財団の活動は、ストリートチルドレンへの直接的なサポートだけではなく、青年

リーダーの育成や親に対する働きかけも行っている。青年リーダーとなるのは、ストリートにいるグループのメンバーや元ストリートチルドレンだった人たち。言語や経済状況など同じ課題を持った青年たちがストリートチルドレンに直接関わっている。

ドロップインセンターは、生活の糧を路上で得ている子ども、親の育児放棄やアルコール・麻薬中毒等により虐待を受けている子ども、人身売買の被害者になる可能性がある子どもなどが自由に使える空間だ。ドロップインセンター長をしているパットさんは「若い頃は色々悪いことをやったが、唯一の

友だちが薬の過剰摂取で死んだ。人ってこんなに簡単に死んでしまうのかと思ったことがきっかけで、財団での活動に参加するようになった。好きだった絵を通して子どもたちにアプローチをする活動に関わってきた」と自身の体験を語る。

山岳民族支援@ITDP/
Lanna Cafe

Integrated Tribal Development Project (ITDP)は、山岳民族の生活向上のために水道・トイレ整備、農業振興、学校の建設・運営、保健所の建設・運営、コーヒー

生産・販売などのプロジェクトを行っている。

かつて山岳地域では麻薬の原料となるケシ栽培が行なわれていた。そのケシに代わる換金作物の一つとして普及したのがコーヒー。ITDPが手掛けたコーヒーは今ではフェアトレードコーヒーとして海外でも販売されている。

大阪女学院大学卒業生・

寺田さんの話@ジョムトン

ジョムトン在住の寺田さんは「高校生の時に参加したスタディツアーでタイ・バンコクにあるスラムを訪問したことがきっかけ

で国際協力に興味を持った。支援をしたいと当初は思っていたが、便利でモノにあふれている中で生きてきたことに気付き、まずは自分のライフスタイルを変える『ライフスタイルの非暴力化』から始めようと思うようになった」とのこと。寺田さんが経営するカフェの名前は「ポーピアン」。意味は「足るを知る」。

山岳民族カレンの村

@メーサリアン/ムシキー

メーサリアンとムシキーには、当会が継続して交流している草木染手織り布を作っ

ている女性グループがある。これまで毎年グループが作った商品を日本に持ち帰って販売してきた。参加者たちは糸を染める、布を織るという工程を体験させてもらった。糸が布になり、カバンなどの加工品になるまでには気が遠くなるほどの時間がかかる。



左上写真/ドロップインセンター長をしているパットさん。(中央)
右上写真/ジョムトン在住の寺田さん。(前列右から3番目)
左下写真/メーサリアン・ペー村の伝統的な高床式の家。屋根は大きな葉で葺かれ、壁は竹でできている。
右下写真/腰織り機で布を織る女性。(ムシキー村)

2019年度 事業方針・計画

方針

「働き方改革の推進と40周年に向けた新たな取り組みの始動」

2019年度は次の二つの目的の達成を目指します。

1. 働き方改革

2018年度から進めている働き方改革を推進する。職員増、業務効率化による各職員の業務負担の軽減に取り組み、研修事業の安定化を実現する。また増員、基盤整備を進めながらも赤字回避を目指す。

2. 新しい社会課題への取り組み

当会は2021年に設立40周年を迎える。故今井鎮雄初代理事長の「新しい社会課題への取り組み」の教えを胸に、40周年を迎えるPHD協会が今何をすべきか、社会にどういったニーズがあるのか、今後を模索する一年としたい。

研修事業

37期研修生はここ数年に引き続き女性3名。

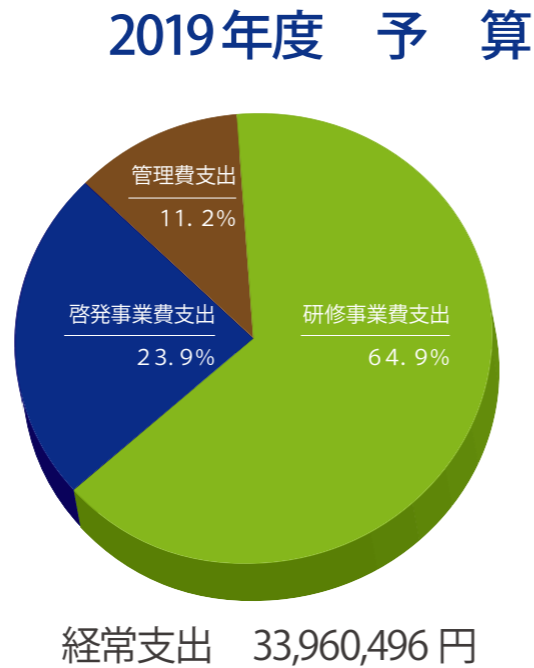
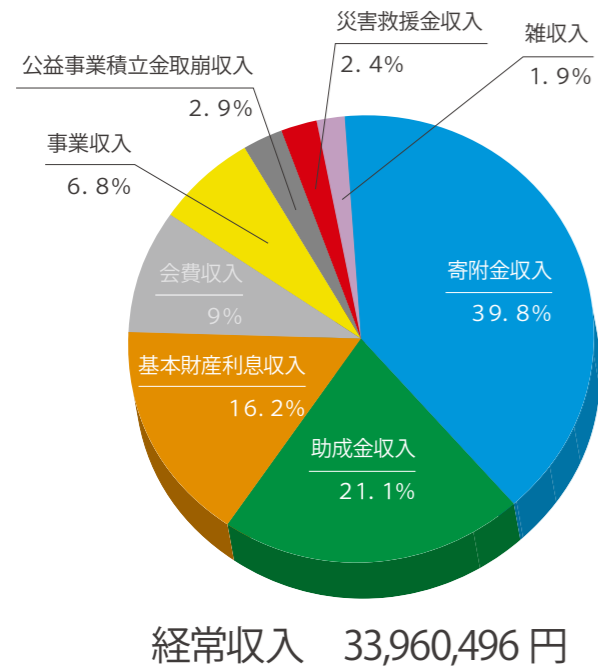
スシラさんは彼女の希望でもある果樹の有機栽培を中心に様々な農作物の栽培に触れてもらいたい。また村の女性グループのために昨年度のサビナさんと協働したい想いもあり、現地の活動に生かせる保育や保健衛生を交えて研修計画を組んでいきたい。

ゼンモーエーさんは自身の村の僧院学校で先生として4年（幼稚園で2年、中学校で2年）の経験がある。彼女は帰国後も村のために同じ学校で働き続けたいという想いがあることから、教育研修を中心として組み、色んな人・施設の中で日本の多種多様な教育に触れてもらいたい。

ブツリさんは、村の女性たちの雇用創出のための洋裁と村のゴミや歯の問題を解決するにあたり必要となる保健衛生の2分野に絞って、より深く学んでいきたいと語ってくれた。彼女の希望、経験とスキルに合うような実践性と意義のある研修案を練っていききたい。

広報・啓発事業

2019年度はクラウドサービスの導入と広報・啓発業務のマニュアル化を行い、「情報と業務の共有化」を図る。広報・啓発業務においては担当が集約して業務を行っていても、より付加価値が高く創造的なアイデアは生まれにくい。価値ある広報・啓発活動のため広範に情報や業務を共有化する土台づくりを行い、2021年の設立40周年を迎えたい。



PHD 活動紹介 2019年3月～2019年6月

3月

- 2日 36期研修生帰国報告会
- 4日 大阪女学院大学 タイ・スタディツアー事後授業（芳田）
- 5日 但馬農業高等学校：NGO相談員（芳田）
尼崎西ロータリークラブ卓話（坂西）
- 6日 篠山ロータリークラブ例会レニ送別会（演）
- 7日 職場体験受入、NPO法人アクセス中村さん（坂西、酒井）
加古川中央ロータリークラブ例会（演）
- 8日 関西学院高等部生来訪（坂西）
研修生・活動支援金発表会（坂西、八木、芳田）
- 9日 加東市連合婦人会交流会（坂西、山本）
岩村史子さん訪問（坂西）
ソディ例会（芳田）
- 10日 2018年度米山記念奨学会歓送会（坂西、濱、山本）
- 12日 36期研修生離日
- 13日 神戸YMCA国際委員会（坂西）
- 14日 NGOインターンプログラム成果報告会（坂西、酒井）
大阪YMCA評議員会（坂西）
- 16日 ひょうご市民活動協議会運営委員会合宿 ～17日（坂西）
- 21日 国際ソロプチミスト姫路西 チャリティバザー（芳田）
- 23日 国際ロータリー第2680地区 米山記念奨学会 地区大会 ～24日（坂西、濱、山本）
- 26日 国際ソロプチミスト神戸 チャリティバザー（坂西、濱、山本）
- 27日 難民事業本部中尾さん来訪（坂西）
- 29日 モーママさん来日（坂西）
- 30日 川西ロータリークラブ55周年（演）

4月

- 1日 定例スタッフ会議（坂西、八木、濱、山本）
辞令交付式（坂西、八木、濱、山本）
- 4日 神戸西ロータリークラブ（坂西）
- 5日 37期研修生来日
- 7日 米山記念奨学生オリエンテーション（坂西、濱、山本）
- 9日 職場体験受入、NPO法人アクセス野田さん（坂西、酒井）
川西ロータリークラブ委員会（坂西）
- 10日 神戸ソーシャルセミナー（坂西）
- 15日 アーユス春合宿 ～16日（坂西、山本）
- 17日 JICA開発教育セミナー打ち合わせ（坂西、酒井）
HYOGON運営委員会（坂西）
- 19日 緑葉社畑本さん来訪（坂西）
- 21日 フェアプラス ツキイチカフェ講演：NGO相談員（坂西）
- 22日 定例スタッフ会議（坂西、八木、山本）
- 23日 PHD協会財務委員会（坂西、酒井）
- 24日 大阪女学院スタディツアー説明会（坂西）
- 25日 育英西中学校・高等学校山元先生 来訪（八木）
- 26日 ESD拡大運営委員会（八木）

5月

- 8日 神戸ソーシャルセミナー講演：NGO相談員（坂西）
- 11日 37期研修生シェアリング（坂西、山本）
ネパール虹の谷福谷さん来訪（坂西）
- 13日 尼崎プロバスクラブ講演（坂西）
- 15日 ESD拡大運営委員会（八木）
- 16日 神戸市シルバーカレッジ講演（坂西、山本）
- 17日 PHD協会監査（坂西、中村）
川西ロータリークラブ例会（演）
- 21日 PHD協会理事会
- 23日 RYLA合宿 ～26日（坂西、山本）
加古川中央ロータリークラブ例会（演）
- 25日 ソディ例会（芳田）
- 27日 コープともしびボランティア振興財団理事会（坂西）
HYOGON運営委員会（坂西）
- 28日 阪神シニアカレッジ講演（坂西、山本）
- 29日 JICA NGO等向け事業マネジメント研修（実用編）～30日（芳田）
大阪YMCA評議員会（坂西）
ESD拡大運営委員会（八木）

6月

- 1日 37期研修生来日報告会
- 5日 篠山ロータリークラブ例会（演）
神戸YMCA国際委員会（坂西）
PHD協会評議員会
- 6日 37期研修生研修オリエンテーション（坂西、山本）
- 7日 川西ロータリークラブ例会（演）
- 8日 南国暮らし講演：NGO相談員（山本）
- 9日 ロータリー米山奨学生・学友交流会（演）
- 10日 JICA関西と協議withエフエムわいわい、シーズエイジア（坂西）
- 11日 大阪女学院大学 ミャンマー・スタディツアー事前授業（坂西）
兵庫県立国際高校住野さん来訪（坂西、山本）
- 12日 神戸市シルバーカレッジ ジョイラックデー（芳田）
コープこうべ総代会（坂西）
- 15日 NGOスタディツアー合同説明会：NGO相談員（坂西、八木）
- 17日 NGOインターンプログラムオリエンテーション（坂西、山本、酒井）
- 20日 神戸モーニングロータリークラブ例会（坂西）
コープともしびボランティア振興財団理事会（坂西）
- 21日 加古川中央ロータリークラブ最終例会（演）
定例スタッフ会議（坂西、八木、山本）
- 23日 市民活動センター神戸総会（坂西）
- 24日 HYOGON総会（坂西）
- 26日 愛徳学園講演：NGO相談員（坂西）
- 28日 川西ロータリークラブ例会（演）
- 29日 神戸YMCA大会（坂西）

2019年4月5日 37期研修生来日。例年通り関西国際空港にて出迎えました。



ミャンマー短期研修生のモーママさん（写真右）と国内研修生山本さん（写真左）。NGOスタディツアー合同説明会のPHDブースでスタディツアーについて説明しています。



PHD News

計 報

米谷収PHD協会顧問が2019年3月24日にご逝去されました。米谷顧問は2000年より当会理事を務めていただき、2017年からは顧問として大所高所よりご指導いただきました。また、研修生の現場にも足繁く通われ、ミャンマー、ネパール、インドネシアでの選考にも立ち会っていただき、タイへのスタディツアーにも同行いただきました。国際人としての立ち振る舞いは私たち職員にとって模範となるものでした。改めてご生前のご貢献に感謝申し上げます。



2015年12月タイ・スタディツアーに参加された米谷顧問（上写真前列右から2人目）。ムシキー村の年越しイベントでは、歌を披露されました。（右写真）。



PHDの働き方改革について一言 ○月×日のPHD協会

職員 濱 別の仕事もこなしながら、ロータリー例会同行中心の勤務体系。イベント多数、じっとできない性分なので幸せ。PHDの仕事こそがストレス解消に。

職員 八木 10時始業は八木発案。働き方改革大賛成、でも生来の要領の悪さが災いして抵抗勢力に。延々と仕事をする姿を反面教師に、皆さんは早く帰ってね。

職員 中村 9時～16時の時短勤務。子育て+遠距離通勤+国際協力を実現できることに感謝。帰路、バス停で我が子が満面の笑みでお出迎え。幸せな瞬間♪

職員 酒井 大学院で研究を続けながらの勤務。7月からは3ヶ月間研究のために南の島へ。日本でも島でも好きなことができ幸せ。篠山からの通勤も苦にならず。

職員 芳田 月の2/3をPHD、残り1/3は島で野良仕事、という働き方。超おススメ、他にはないめったにない雇用体系かも。この形態の長期継続を望む。

職員 坂西 働き方改革の結果、残業増加?繁忙期が常態で、物忘れがひどいと職員から指摘される日々。脱残業で週一は家族と食卓を囲み、目指せ、脱母子家庭。

職員 山本 前職よりも始業時間が3~4時間ほど遅く、起床時の目の血走りがクマとも祝お別れ。その分、帰るのが遅くても苦にならないとか。あれっ、働き方改革?

職員 古寺 会計の専門家として他のNPOを数団体掛け持ちしつつ、PHDには週2~3日の勤務。都合に合わせて出勤、自由度の高い勤務形態に大変満足。

以上、谷上駅からの(心の)距離順

オンライン(クレジットカード)で会費のお支払い



PHD協会では、オンラインで会費のお支払いができます。方法は簡単、お手元のスマートフォンを使って下記のQRコードから、もしくはURLを入力して「会員:クレジットカード決済ページ」にアクセスしてください。あとはお客様情報と決済金額を入力、決済画面から会費をお支払いいただけます。また、同様に「寄付:クレジットカード決済ページ」はオンラインでご寄付できます。

クレジットカード・ オンライン会費ページ

https://congrant.com/credit/form?project_id=587



クレジットカード・ オンライン寄付ページ

https://congrant.com/credit/form?project_id=586



寄付



寄付控除

持っている
ものの10%を
わかちあおう。



PHD協会のクレジットカード・オンライン決済ページはリタワークス株式会社のクラウドサービス「コングラント」を利用しています。



2021年PHD協会は創立40周年